

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標	<p>1. ラオス・ビエンチャンの知的障害者の日中生活自立を促す。</p> <p>2. ラオスにおいて知的障害者の新しい就労ロールモデルを作り、知的障害者の社会自立の可能性を社会に啓発する。</p>
(2) 事業内容 (ア) 知的障害者生活支援 (イ) 知的障害者本人への日中生活支援 (ウ) 簡易職業訓練の実施 (生活支援・体力向上 通年) (エ) ビエンチャン市・県への知的障害者事情調査 (オ) 本邦研修 (カ) 村長・サポート企業への知的障害者理解醸成及びセンターのPR活動のための啓発イベントの実施	<p>2017年2月～3月</p> <p>知的障害者センターとの事業開始の際のベースライン調査 カリキュラム改善のための全スタッフ10名、ボランティア2名、利用者41名、親22名に対する障害の種別の確認、特性、程度、年齢、職能など現状調査。問題点の抽出。</p> <p>2017年4月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生活支援プログラム策定ワークショップ開催 4月21日～4月25日</li> <li>日本人専門家2名を招聘</li> <li>対象者：知的障害者センタースタッフ、親、知的障害者本人</li> <li>ニーズ調査を基に、知的障害者センターの概要や現状の把握及び現在抱えている問題点や掲げている目標、現在のラオスの障害者を取り巻く状況の説明、指導を実施。個別支援計画の模擬実施。</li> <li>日本人専門家が個々のニーズに沿った支援を行うことの重要性及び個別支援計画の必要性を説明し、個別支援計画の記載の指導と助言を行った。又、日常生活支援にあたり教材の寄付を頂き、スタッフ、指導員に対し、有益な支援方法の指導を行った。</li> <li>・第1回親の会開催 4月22日</li> <li>知的障害者センター職員・LDPA職員 12名、保護者 15名・通所者 15名</li> <li>日本人専門家 2名</li> <li>・センター通所者及び保護者が集まり、知的障害を持つ子供への思いや抱えている不安、これからの子供に対する期待やセンターに対する要望をグループワークにより話し合い、発表した。それに対して専門家が助言を行った。親の会が公式に発足し定期会合を行うことで合意した。</li> </ul> <p>2017年5月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個別支援計画の作成</li> <li>知的障害者センター支援員が、「日常生活」、「対人関係」、「行動・態度」の現在の状況をアセスメントし通所者の現状を理解。親とも丁寧に話し合い、その上で全利用者の個々のニーズに対応した長期目標・短期目標を設定し、適切な支援に繋げるため具体的な支援方法を示した。</li> <li>・清掃反復練習 5月15日</li> <li>当会の就労支援の場としてオープン予定である当会カフェの清掃活動を実施。知的障害者センター支援員及び当会スタッフの指導の下</li> </ul>

清掃5を行った。

・本邦研修実施 5月22日～6月2日

対象：4名の知的障害者センターの現役指導員3名とセンター長  
日本の知的障害者の就労、教育、生活の場での支援方法を学ぶことにより、ラオスでの支援に活かすために、就労支援事業所、特別支援学校、グループホーム等を視察した。ラオスの知的障害者センターでも行える内容を研修の中で探しながら、熱心に研修に参加し多くのものを吸収しようとしていた。

研修の中で障害者福祉制度や法律についても深く学ぶことができた。ラオスでは知的障害者のための施策が確立されていないため、知的障害者センタースタッフ一同日本の制度やサービスに感銘を受け、会長はラオスに帰国した後政府に請願書を提出するとの意思を示していた。

2017年6月

・第2回親の会開催 6月15日

知的障害者センター職員・LDPA職員 6名、  
保護者 29名

本邦研修に参加した知的障害者センター会長が研修の報告を行った。本邦研修で学んだことや日本の制度やサービスについて、日本の知的障害者の就労・教育・生活の場について、そして研修を踏まえた上でのこれからのアクションプランを示し、センターの改善点を保護者の前で発表した。

・知的障害者センター主催のスポーツアクティビティに参加

6月19日

当会からは、卓球バレー、フライングディスクの資材を提供、当会卓球バレーのトレーナー1名と当会スタッフ2名が参加。知的障害者センター通所者及び保護者、支援員との交流を楽しみ、ユニバーサルスポーツを通じた交流を行った。

・当会カフェにて簡易職業訓練 6月26日～継続中

就労支援の場として当会のカフェ（8月1日オープン予定）をオープンするため、週に2回清掃を中心に事前トレーニングを開始した。トレーニングの中に毎回清掃の時間を設けることにより、清掃反復練習を行った。又、挨拶・自己紹介・身だしなみなどのマナーやエチケットを毎回指導、反復練習することにより、知識と技能の定着を行った。更に就労の可能性と選択肢をより広げるため、基本的な学習能力（読み書き・計算・時計の読み方やお金のやりとりなど）向上のための時間を毎日設けた。毎日少しずつ学び、繰り返すことにより基礎学力が伴ってきた。

今回の就労支援の対象となっている6名は全員過去に就労や職業訓練の経験がなく、当会の職業訓練で学ぶことが初めての就労体験で

あった。当会の訓練に通うことを皆大変楽しみにし、欠勤もなく、家族の協力もあり、就労定着はスムーズに成し遂げられた。

2017年8月

・仮想就労の場「Minna no Café」を自己資金でオープン(8月12日)。就労可能レベルの軽度知的障がい者訓練生6名を受け入れて、接客や清掃に関わる就労トレーニングを開始した。

・日本人専門家2名によるトレーニング

知的障害者日中活動支援及び簡易職業訓練の日本人専門家を招聘。Minna no Caféで行っている日中支援活動、職業訓練の状況確認。また、知的障がい者センターの指導員の指導メニュー、個別支援計画の実施状況確認及び障がい特性に合わせた支援方法や教材の紹介など、特に知的障害者センター指導員及び当会スタッフ、指導員候補生に向けたトレーニングの実施。意思表示が困難であり、支援員が支援に難しさを感じる重度の自閉症の生徒に対する学習指導を行った。その後、センターではこの学習方法を取り入れ、自閉症生徒に対する適切な学習支援を行えるようになった。

・知的障がい者センターにおける個別支援計画作成状況確認

個別支援計画作成のために必要なアセスメントの様子を当会スタッフが同席し確認を行った。丁寧かつ十分なアセスメントが行えているか、本人の意思を尊重した計画になっているかを確認し、個別支援計画の意義や実施方法を再度確認し、モニタリング・アドバイスを実施した。

・日本人簡易清掃専門家による掃除の指導

1週間に渡り、正しい掃除の順番や、道具の使い方などの指導を絵や映像を見せながら、反復練習を行った。毎日繰り返し反復練習することにより、清掃スキルの向上と定着を目指した。事前事後職能定着テストを実施し、清掃の流れの工程を細分化し一つ一つ丁寧に指示通りできているか、習得能力の簡易テストを行い、10名の知的障害者のうち8名がレベル8以上(15工程のうち12工程はクリア)を獲得、合格基準と超えた。

・製菓専門家による製菓指導

Minna no Caféで販売するお菓子の新メニューの指導を受けた。ビスコッティ、カップケーキ、マフィンが新たにメニューに加わった。専門家の手際の良さや迫力に訓練生達は圧倒されながらも、新しいお菓子に挑戦することを楽しんでいった。製菓作成の仕事は沢山の行程があり、行程を細分化し、衛生面を徹底的に教えながら、混ぜる、こねる、形を整えるといった作業を改めて見つめなおし、知的障害者が出来ることを見つけ、伸ばし、職能を伸ばしていくことが出来た。

・ユニバーサルスポーツ卓球バレー及びユニバーサル水泳アクティビティの定期練習化（通年）

ユニバーサルスポーツ及び水泳の専門家によるユニバーサルスポーツ卓球バレーとフライングディスク、水泳指導が行われた。ユニバーサルスポーツの卓球バレーは卓球テーブルを利用し、鈴の入った卓球ボールを使い、板でそのボールを転がしながら相手ゴールを狙い6対6で楽しむスポーツ。日本でも知的障害者にとっても楽しめるスポーツである。また、フライングディスクも知的障害者スポーツとしてとても日本では認知度が高い競技で、frisbee競技に似ている。場所を取らず、ルールも簡単で高齢者、障がい者、子供の大人も楽しめるスポーツである。また水泳は障がい者水泳の選手たちがピアサポートにより知的障がい者の水泳をサポート。水に入ること、水を楽しむことから始まり、正しい泳ぎ方を教わり、この日以降生徒たちは水泳にすっかり夢中になっていた。健康維持のためにも知的障害者支援のプログラムではスポーツを取り入れることは重要であり、とても楽しみながら皆が参加できた。

・ラオファッションウィーク 9月11日～15日（啓発イベント）ラオファッションウィークの会場にてIDブースを出展。

カフェで作ったお菓子の販売を行った。日常より当会クッキーチームスタッフと一緒に企業や学校に販売に行っているが、いつもと違う大きな会場と華やかな雰囲気訓練生も興奮している様子で、販売にもますます力が入った。会場ではジョブコーチの指導の下、お菓子のPRやお金の受け渡し、袋入れなどを行った。

又、知的障がい者訓練生がモデルとなり、ラオスのモデルたちと一緒に日本の四季をイメージして作られたドレスを身にまといランウェイを歩いた。（9月15日）障がい者が堂々とランウェイを歩く姿に観客からは大きな拍手をもらい、多くの人々の心を魅了した。

・高齢者・障がい者ウィークブース出展 9月27日～28日

アイテックで行われた同イベントにてブースを出展。

カフェで作ったお菓子の販売や当会の知的障害者支援活動の説明も行った。当会のカウンターパートである知的障がい者センターもブースを出し、センターで生徒たちが作った小物を販売。又、ステージではラオス伝統舞踊や楽器の披露を行った。

・知的障害者センター指導員養成・ジョブコーチ養成ミーティング毎月1回実施。

知的障がいの種類や、それぞれの障がい特性に応じた接し方など知的障がい者支援において基本的な指導法から、日本の知的障がい者就労のモデル企業の支援方法、企業は障がい者就労においてどのような工夫や努力を行っているかなどを通して、知的障がい者支援に関わる上で必要な知識やアイデアについての講義や意見交換会を月1回行った。また、当会に通所している訓練生各々の状況確認、特徴や注意点などの支援に当たって必要な情報の共有を行って

る。

・日中生活支援（職業体験及びアクティビティ）

対象者：知的障がい者センター生徒（通年）

知的障がい者センターの生徒に対し、当会のカフェや事務所も併せ活用しながら、日中生活支援を実施。日中のコミュニケーション、身辺自立トレーニング等。知的障がい者センターに通所している、まだ就労に結びついていない生徒35名に対して、事前学習として働くことを模擬体験を実施。また、子どもに対しては、正しい手の洗い方、身だしなみ、自己紹介など、日常生活において必要なコミュニケーションスキルを教えた。当会に通所している訓練生は、センターから来た生徒たちの世話係となりピアサポートによる支援を行っている。訓練生たち自身も、自分が教える立場になることによって、大人としての自覚が芽生え、精神的な成長に繋がっている。普段は仕事をやりたがらない訓練生も、この日は張り切って率先して仕事に励んでいる姿が見られる。

・親の会実施（通年：毎月1回実施）

当会からの報告を中心に、知的障がい者センターからの活動報告も行った。保護者からの報告の機会も設け、「ADDP・知的障がい者センター・親」三者の協力体制を作り上げ、大きな信頼を得た。今まで参加したことなかった保護者たちの参加も積極的に見られるようになった。ディスカッションの時間はいつもオーバーするほど、親からの意見やアイディアは途切れなく出てくる。親の協力の力強さを感じる。

2017年10月

・日本人日中支援活動専門家による知的障害者センターにおけるラオス人指導員のアセスメント及びに日中支援活動支援の能力強化研修（10月）対象：知的障害者センター指導員6名

知的障害者センターにおける指導員の能力強化研修。すでに通年行ってきた個別支援計画の策定、実施のフォローアップ及び指導員のアセスメントの実施。

2017年11月

・スペシャルオリンピック ミャンマー大会にむけて強化練習

11月7日～11月10日

当プロジェクトの日本人専門家がボランティアでラオスまで来てくれ、大会に向けての強化練習を行った。日本で知的障がい者に対してのサッカー指導を数十年に渡り行っている専門家により、正しいボールの蹴り方、パスの出し方、ディフェンス、オフenseなどの基本的な技術から、休憩時間の使い方や選手としての態度など、精神面での在り方の指導も受けた。

知的障がい者センターでの活動の1つとしてサッカーを行うこともあるため、センタースタッフに対して、サッカーの教え方の指導も

行い、指導力強化も行った。

(ラオス労働社会福祉省側の書類不備と予算の問題により、大会は不参加となった)

・WIG BAZZAR ブース出展 11月11日

事業広報啓発の一環としてブースを出展し、当会の活動説明、知的障害者が作るお菓子の販売を行った。企業や団体、各国大使館からの出店もあり、多くの来場者が当会ブースに足を運んでくれた。訓練生は3名が販売に参加。彼女たちが働く姿を見て近くのブースからは知的障がい者が働いていることによる驚きの反応が見られた。ラオスではまだ知的障がい者は何もできないと思っている人が多くいることを再認識した。訓練生達の人懐こさと明るい性格で周りのブーススタッフとすぐに溶け込み、会話を楽しむ様子も見られた。障がい者本人を通じた啓発活動の大切さを改めて感じた。

・ビエンチャン市における知的障がい者事情調査

11月14日～11月17日 於：ビエンチャン近郊

対象：ビエンチャンで暮らす、家で過ごしている16歳以上の知的障がい者25名

知的障がい者センタースタッフと労働社会福祉省職員同行のもと、一軒一軒家庭を訪問し、生活調査とニーズ調査を行った。

知的障がい者センターに通所していない知的障がい者のうち、ほぼ全数がただ家にいるだけの生活をしている。

なぜセンターや学校に通わないのか、1日をどのようなスケジュールの中過ごしているのかなどを1家庭1時間ほどかけて聞き取り調査を行った。

センターに通えない理由は、送迎する人がいない。送迎するための乗り物がない。センターへの利用料が支払えないという意見が大多数であった。

しかし親が子供に望むことは、働いて欲しい、1人で生活できるようになって欲しい、勉強して欲しい、社会参加して欲しいなど、親は自分たちが亡き後のことを懸念し、子どもたちの自立を望んでいた。

・清掃活動 (簡易清掃職業訓練)

CMR (リハビリテーションセンター) 内病院の清掃活動実施 (12月8日) LDPA (ラオス障がい者協会) 清掃活動 (12月15日)

メコンレストラン清掃 (1月30日)

知的障害者センターや当会事務所、カフェだけでなく、外部の清掃活動を行うことにより、清掃活動のPRと啓発活動を行っている。

掃除は訓練生の多くはあまり好きではないが、ジョブコーチのサポートのもと、丁寧に掃除を行った。清掃先では「ありがとう」「すごいね」「こっちもお願い」と言葉をかけてもらいながら、一生懸命に掃除を行った。2018年2月現在、徐々に外部(ラオス企業や日本の団体など)から清掃活動の依頼を受けており、清掃活動の

	<p>収益事業としても動き出している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日立造船株式会社主催 LAO GREENTECH CONTEST ブース出展 1月20日</li> </ul> <p>12月に大使公邸で行われた天皇誕生日レセプションにおいてブース出展の機会を頂いた際に、当会の活動に関心を持ってくれた日立造船(株)より、ブース出展のお話を頂いた。企業側としてはCSRの一環としての取り組みであった。学生も多く来場しており、若い世代に対しても啓発活動ができる良い機会となった</p>
<p>(3) 達成された効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本邦研修で学んだ日本の知的障害者に対する「個人のニーズを最大限尊重する個別の支援方法」をラオスでの支援に取り入れ活かしている。具体的には、センターの1日のスケジュールの見直しであり、50人の登録知的障害児・者は5歳から29歳の幅広い年齢層であり、障害も程度、特性も様々で中には自閉症と知的障害の比較的重複障害者もいる。様々な年齢、知的レベルで構成されている利用者に対して、活動の選択肢がほとんどなく、画一的な指導であった。カリキュラムの見直しを始めた2か月は徹底的に行い、これまで何の違和感もなく続けてきた昼寝の時間をなくし、その時間に学習やアクティビティの時間を設けることにより、学力・能力向上、職業能力向上に努めた。又、通所者への対応として「見守り」という支援方法があることを日本で学び、早速支援に取り入れ対応を行っている。センター内も配置換えを行うことにより個室を増やし、能力に応じたグループ分けをし、学習に集中できる環境を作り出した。</li> <li>・知的障害者センター支援員により、通所者の状態のアセスメントを行い、個別支援計画を作成した。今まで書類で情報を残していなかったため、通所者情報を支援員が口頭で伝えてきた。その為成長の記録があいまいであったり、伝え漏れや、スタッフの入れ替わりにより正しい情報が伝わっていなかった。今回このように書類に落とせたことはセンターにとっても大変有意義であり、目標を設定することにより具体的な支援方法を定め、支援員間で共有し、支援に当たれるようになった。</li> <li>・当会カフェにて、清掃反復練習を実施することにより、清掃スキルの向上を図っている。改善点は教え、繰り返すことにより安定した技術の定着を図っている。</li> <li>・就労可能と見込まれるまずは6名の利用者を対象に、当会カフェを仮想就労の場に見立て、就労支援を行っている。簡易清掃を中心に行っているが、ターゲットの知的障害者6名は軽度の知的障害であり、理解力も高いことから、職業能力に関しては様々な潜在能力を持っていることがわかった。掃除から応用の仕事である皿洗い、クッキー作りやコーヒーの淹れ方、接客、お金のやりとりを学び、まず当会カフェにて就労できることを目指す。</li> </ul>

又、基礎的なマナーやエチケット、基礎学力の習得を目指している。

毎回反復練習することにより、自分の名前をスムーズに書けるようになった。数字や時計の読み方の練習も毎回繰り返し指導し、家でも取り組めるよう、教材を渡した。

- ・ 当会でも通所者6名を受け入れるにあたり、通所者本人、保護者、当会の三者にて面談を行い、本人の就労に対する意向を確認すると共にアセスメントを行い、三者共通認識の下でカフェで就労する上での目標設定を行った。この目標を基に支援方法を設定し、支援にあたっている。
- ・ 知的障害者の職業訓練において、指導サポートの専門員としてジョブコーチの存在が重要である。就労の現場で丁寧に指導できる専門員として知的障害者センター指導員や当会スタッフがジョブコーチ訓練を受け、養成された。養成されたジョブコーチは職業訓練や就労現場で活躍中、又は活躍予定である。
- ・ 親の会が正式発足され、親と知的障害者センターの連携協力が促進された。全保護者を対象とした親の会ミーティングは月に1度のペースで定期的で開催した。一人ひとりの親の思いを受け止め、親も巻き込んで就労ロールモデルを作っていく土台ができた。また親の会を通じて親同士の連携も強化され、大いにエンパワメントされている。親からの絶大な指示と協力も得られている。知的障害者センターの活動のフィードバックもできてとても良い形となってきた。
- ・ 毎朝必ず行っているカフェや事務所内の清掃と、外部施設の清掃活動によって反復練習を実施することにより、清掃スキルの向上を図っている。ジョブコーチの指導のもと、丁寧かつ完璧な清掃を目指し、職業能力が高くなってきている。
- ・ ラオスでは知的障がい者は何もできないと思っている人がまだ多いのが現状である。社会に出て、彼らが働いている姿を実際見てもらうことは啓発となる。なるべく外部と接点を持てるような外部清掃機会を作ることを努力してきた。これまで続けてきたトレーニングの成果が実り、2月より企業から清掃の仕事の依頼を頂き、オフィス内の掃除の仕事が始まった。スピードは速いとは言えないが、仕事の丁寧さは企業のスタッフからも感謝の声を頂いた。
- ・ 知的障害者の職業訓練において、指導サポートの専門員としてジョブコーチの存在が重要である。就労の現場で丁寧に指導できる専門員として知的障害者センター指導員や当会スタッフがジョブコーチ訓練を受け、養成された。
- ・ 知的障害者センターの指導員と彼らの支援技術向上とモチベーション維持のため、月に1度、スタッフミーティングを行っている。チーフ指導員、チーフジョブコーチを2名選抜し、彼らを中心に新しいジョブコーチの育成もOJTを通じて行っている。

・ 軽度の知的障害で就労可能と見込まれるまずは6名の利用者を対象に、当会カフェを仮想就労の場に見立て、就労支援を行った。簡

	<p>易清掃を中心に行っているが、ターゲットの知的障害者6名は軽度の知的障害であり、理解力も大変高いことから、職業能力に関しては様々な潜在能力を持っていることが分かった。欠勤も一度もない。清掃から応用の仕事である皿洗い、焼き菓子作りやコーヒーの淹れ方、接客、お金のやりとりを学び、まず当会カフェにて就労できることを目指し、達成できた。又、基礎的なマナーやエチケット、基礎学力の習得を目指している。毎回反復練習することにより、自分の名前をスムーズに書けるようになった。数字や時計の読み方の練習も毎回繰り返し指導し、家でも取り組めるよう、当会で開発した教材を渡し、家族とも協力しながら基礎学力もつけている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事業前半に作成した各知的障害児・者に向けて策定した個別支援計画を中間時点で見直しを実施した。スタッフ全員で話し合いを行い、当初計画した目標が達成できたか、この目標や支援方法は現在も適切であるかどうか、意見を出し合いながら丁寧にアセスメントを行い、変更が必要な訓練生に対しては個別支援計画の内容修正を行い、保護者と本人の同意と協力を得ながら更に計画を改善した。時間の経過によって状態や能力、感情に変化が見られる訓練生もいる。現在の状態をきちんと見極め、個人に合った必要な支援を行うことを何よりも大切としているこの個別計画がしっかりと定着してきた。</li> <li>・全保護者を対象とした親の会ミーティングは月に1度必ず開催している。当会や知的障がい者センターからの報告だけではなく、親も巻き込み、保護者からの報告の機会も設け、闊達な意見交換の会となっている。最初に開催された親の会では、知的障がい者センターやLDPAへの不満、障がいを持つ子供に対しての不安の意見が多く後ろ向きな印象であったが、現在の親の会は前向きな意見が多く、親の積極的な発言やアイデアが飛び交い、当会の活動に対しても大変協力的である。親を通じて外国の障がい者団体も当会のカフェを見学しに来てくれた。保護者同士の繋がりを強化して、親から社会や国に対して発信していく力を付けていって欲しい。</li> </ul>
<p>(4) 今後の見通し</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジョブコーチ育成</li> </ul> <p>2期目となる2月より4種の職業訓練に対するそれぞれの業種のジョブコーチの育成が始まっている（現在11名がジョブコーチとして活躍している）</p> <p>7日間のジョブコーチ育成研修では、当会の大切としている「個別のニーズや能力を重視した個別支援の大切さ」をはじめ、知的障がい者についてや、支援方法についての講義及び現場実習を行った。カウンターパートである知的障がい者センター長やLDPA（ラオス障がい者協会）副協会長による講義もあり、知的障がい者支援に関わる様々な団体より、各々の視点での支援の在り方を学び、支援の楽しさ、大変さ、大切さを学び、更に通年のOJTを通じてラオスで初めての福祉職である「ジョブコーチ」を養成し、知的障害者の就</p>

労定着をしっかりと支える仕組みを作っていく、労働社会福祉省にも協力を要請したい。今後は、知的障がい者支援あたってジョブコーチの存在はとても大切になってくる。これから彼らがジョブコーチとして正しい支援を行っていくために、専門職としての彼らの指導・育成に第2期はしっかりと注力していく。

・農作業プログラムを通じた簡易技能訓練研修

農作業の準備は順調に進み、ジョブコーチの指導の下、知的障がい者訓練生の活躍により多くの有機栽培で育てられた野菜が収穫できるまでになっている。これから大切になってくるのが販売である。お金の管理は難しいことであるが、重度の知的障がい者も販売に参加でき、就労から排除されない仕組み作りをする。

・清掃プログラムを通じた技能訓練研修

4月より企業から清掃の依頼を頂き、オフィス内の掃除の仕事が始まった。日々の清掃トレーニング反復練習や、専門家の指導を受けて、清掃のスキルやスピードを上げていくことを目指す。

・クラフトを通じた技能訓練研修

ラオスで個人の制作活動をしている方と、ホアイホン職業訓練センターより縫製の仕事を頂いた。細かく器用さが求められる作業のため、縫製ができる訓練生はごくわずかである。可能性のある訓練生はトレーニングを重ね、作業できる訓練生を増やしていくことを目指す。また、アロマ製品の制作も予定しているため、様々な作業の中でできることをみつけ、その能力を伸ばしていく。

・知的障害者センター支援員が個別のニーズを配慮した支援を行うために、適切な個別支援計画を作成できるように引き続き支援していく。

・十分な就労への能力を身に付けた後は、一般企業へ就労を目指す

・一般企業就労に向けて、就労先、サポート企業を増やしていく。